「特集ワイド」へご意見、ご感想を t.yukan@mainichi.co.jp ファクス 03・3212・0279

特集ワイド

無理な解釈改憲 来るぞ「倍返し」

村上誠一郎氏と歩く 憲政記念館

今や「草木もなびく首相官邸」とささやかれる。憲法解釈を変更して、集団的自衛権行使容認を閣議決定した安倍晋三首相に、自民党内のだれも逆らえない様子をやゆする言葉だ。だから「解釈改憲は憲法を壊す」と声を上げ、安倍首相にただ一人異を唱えた村上誠一郎元行革担当相(62)は、さぞや孤立を深めているのではないか。東京・永田町の憲政記念館に誘い、思いを聞いた。

自民党でただ一人 首相批判展開

続報真相

集団的自衛権の集中審議が終わった国会議事堂を間近に望む記念館。「祭りの後」というわけでもないだろうがこの日、普段は永田町かいわいを慌ただしく走り回る黒い議員公用車もまばらだった。「平和憲法の危機」と言われるが、記念館に人影はほとんどない。セミ時雨だけが響き渡る。

そこで本重100キロ超の巨体を揺らして汗をふきふきやって来た村上さん、正面に立つ「憲政の神様」尾崎行雄の銅像前でしみじみと一言。「懐かしいね。最初に来たのは小学6年の時、学校の見学でね。世の中には恵まれない人がたくさんいることを知った時分さ。だから尾崎先生ら偉大な政治家の事跡に触れて感激して。大人になったら政治家になってここに戻ってくる、と誓ったんだ」

表情はさばさば、決して暗くはない。「野菜スープを飲んでいるが、やせないっ」というぐらい元気。意外だった。なにせ今や党内から「党を批判するなら離党しろ」などの陰口も聞かれるほど。さぞや針のムシロ、突き刺さる同僚の視線に顔をしかめ、大きな体を縮こまらせているのでは……と勘ぐっていた。

事実、6月20日に都内のホテルで開かれた自身の政治資金パーティーには、普通の議員のパーティーならば駆けつけるはずの大物議員の姿はなく、一部の同僚が姿を見せただけ。今回の集団的自衛権の問題でも、7月1日の自民党総務会は「集団的自衛権の行使容認は憲法9条からは読み得ない」と反対する村上さんを事実上、黙殺する形で閣議決定案を了承した。何だか蚊帳の外、党内の嫌われ者になっているように映るのだが。

「そんなこと気にしてられるかって。考えてみてよ。この人たちに比べればオレが異論を吐こうが嫌われようが、議会を追放されるわけでも殺されるわけでもないんだよ」

憲政記念館のメイン、2階展示室。憲政史に名を刻む先達の肖像画を指して、地声の大きな村上さんが声を高めた。大正時代、立憲主義に基づく護憲運動を展開した尾崎行雄、尾崎とともに運動を主導し、後に5・15事件(1932年)で殺害された犬養毅、2・26事件(36年)の翌年、軍部の台頭と言論の自由への圧迫を批判した浜田国松……2・26の4年後、泥沼化する日中戦争を巡り「反軍演説」をして衆院議員を除名された斎藤隆夫も並ぶ。

「特に斎藤、浜田両先生はあの暗い時代に堂々と正論を述べた。それが今はどうだ。憲法9条や歴代の政府見解をどうひっくり返したって日本は集団的自衛権を行使できないのは明白だ。それを『カラスは白い』と強弁するのと同じ、無理やり解釈を変えた。憲法の破壊と言わずして何と言うのか。これに異を唱えないのでは政治家として両先生に顔向けできない」

86年の初当選後、所属したのはその斎藤隆夫と同郷の河本敏夫・元通産相の派閥だ。河本氏は30年、旧制姫路高校時代、教練中の陸軍兵士に向かって反戦平和を訴える演説をし、学校追放、実家も勘当された。「少数でも正しいと思ったことは言う。それが河本派の伝統だよ。それなのに……」。民主党に惨敗した後の2010年「もう派閥に所属する意味はない」と退会した。当時の派閥トップは今回の解釈改憲で中心的に動いた高村正彦副総裁。「高村さんも昔は郵政民営化に反対して骨があったが、変わったなあ。今では弁護士出身とは思えない憲法解釈に走ってしまった」。淡々と語る。

「反軍演説」をした斎藤隆夫の肖像画(右)などを見ながら、「サラリーマン化した政治家が多くなった」と嘆く村上誠一郎衆院議員=東京・永田町の憲政記念館で17日、丸山博撮影

むらかみ・せいいちろう 1952年、愛媛県今治市生まれ。東京大法学部卒。86年以来、衆院連続9期当選。小泉内閣の2004~05年に行革担当相。衆院政治倫理審査会長。

「オレ おかしいかい?」

村上さんのおっしゃることは、確かにごもっともではある。でも所詮、政治は数の世界。いくら正論を唱えても一人で物事は動かせない。そう疑問をぶつけるとごそごそ、持参した大きな手提げ袋からファクスの束を取り出した。「このまま進むと国の形がなくなる。村上さんに頑張ってもらいたい」「自民党に村上さんのような考えの人がいてほっとした」。全国から寄せられた激励の声だ。ファクス、メールが1000通近く届いているという。

「地元の愛媛から来るのは分かるけれど、全国から来たのには驚いた」

有権者だけではない。村上さんと同じ河本派(現・大島派)に属し、後に自民党から新党さきがけに転じた井出正一元厚相(75)からは「亡き河本先生も評価してくださっているはず。自民党の良識派としてあなたの存在は貴重。今後の健闘を祈っています」との手紙が届いた。「このまま正論を貫け」と電話を掛けてきた自民党三役経験者もいれば、驚くことに、ある首相経験者からも「あなたの言っていることは正しい」とじきじきに励ましが寄せられた。

「オレは一人だなんて思ってないさ。今の安倍政権のやり方に有権者や見識ある政治家は疑問を持ち始めている。前回衆院選は自民党が大勝したが、次は国民から『倍返し』でしっぺ返しがくるかもしれない。そう思って正論を言うんだが、永田町に来るとオレは変わり者扱いだから、参るよなあ」

かつての小選挙区制移行などの一連の政治改革や郵政民営化にも村上さんは異を唱えた。郵政民営化は最終的に賛成したが、昨年秋の特定秘密保護法の衆院採決では途中退席して反対の意思を鮮明にした。一部の若手議員からは「村上先生と思いは同じ」とささやかれるが、表立って同調する声や動きは皆無だ。「選挙地盤が強いから『いい格好』ができるだけ。『あまのじゃく』というか、目立ちたがりなのだろう」との冷ややかな見方が大半だ。

しかし「正論を吐き続ければ、必ず有権者に届く。それが政治を動かすんだ」と意に介する様子はない。村上さんは戦国期、瀬戸内海を支配した海賊「村上水軍」の子孫らしい。確かに自由に政権批判を繰り広げる様はさながら党内を暴れ回る海賊のよう。「あまのじゃく」もここまでくればかなりの骨太だ。国会見学ついでに憲政記念館に立ち寄ったという自民党支持者の男性も「村上さん? 知っているよ。言っていることに全面的に賛成はできないが、すごいよね。集団的自衛権の件は安倍さんはおかしいと思う……」。

例の総務会ではベテラン議員を中心に「本来は憲法改正が筋だ」という意見も出るにはあった。「これが救いだった。みんな腹の中ではおかしいと思っている。表立って反対できないのが最大の問題だよ」。小泉純一郎元首相が自身に従わない議員に党公認を与えず、落選に追い込んだ「郵政選挙」の記憶はいまだ党内に生々しい。加えて入閣適齢期の中堅議員は、8月にも安倍首相が切るとされる内閣改造などの人事カードに気もそぞろ、異論は唱えづらい。

「彼らの気持ちは分かるんだ。でも国のかたちが大きくねじ曲げられようとしている時に、政治家が今、正論を言わなくてどうするんだ。オレの言っていること、おかしいかい?」。激した村上さん、涙をしたたらせながら、居並ぶ肖像画を見つめた。

涙には、党の現状への痛憤に加え、孤軍奮闘した憲政の先達に自分を重ねるヒロイズムも少し混ざっているのだろうが、それだけではない。第二次大戦で戦死した伯父の存在がある。「京都帝大の学生だったが、学徒出陣でビルマ(現ミャンマー)に送られて。まだ24歳だった」

集団的自衛権を行使する際は「必要最小限だけ」というのが政府の言い分だが「必ず自衛隊員の血が流れる結果になってしまう。ロートルの我々ではない。伯父のような、未来ある若者の血なんです」。

国会や事務所からの行き帰り、伯父もまつられている靖国神社の前を通る。先日まで夏のお祭りがあった。ちょうちんの下、人々が笑いさざめいていた。

「あの地獄のような戦争を経て今がある。あの時代が繰り返されない保証なんてどこにもない。オレは自民党で頑張り続ける。オレこそ自由に正論を吐く『ミスター自民党』なんだ」

絞り出すような声に、セミ時雨が重なった。

【吉井理記】